

はじめに

令和7年度も残すところあとわずかとなりました。各学校におかれましては、校長先生のリーダーシップのもと、児童生徒の「知・徳・体」のバランスの取れた成長に向けて、「ワンチーム・チーム学校」として成果と課題を共有し、教育課程の確かな実践により、充実した教育活動が展開されてきたことと思います。

児童生徒の学力の定着・向上に目を向けると「授業改善」を柱に据え、主体的・対話的で深い学びの具現化に取り組むとともに、それぞれの学校が自校の「強みと弱み」を的確に分析し、成果の継続と課題克服に取り組んできております。

その成果は、一朝一夕に現れるものではないと思います。学校間や学年及び教科によっては厳しい実態もあり、学力の定着・向上に課題が継続していることも事実です。

ただ、各種学力調査の検証によって明らかになった課題については、学校全体であらためて共有を図り、日々の教科指導の中で意識して取り組んでいただきたいと思っております。

あわせて、「授業改善」を目指し教科指導の質的向上を図るうえで、重要になってくるのが「学級経営」です。学級会活動や特別活動、学校行事等ではもちろんのことですが、普段の教科指導の中での学級経営も重要なウエイトを占めていると思っております。「学級経営」と「教科指導」は「両輪」の役割を果たすものでなければならないと思っております。四万十市の子ども達が、真に自立し「確かな学力の定着と向上」が図れるよう、学校全体で目的意識を持ち、創意工夫された意欲的な取り組みが推進されることを願っております。

そして、上記に記した「学級経営」と大きく結びついていると思われるのが、四万十市の今一つの大きな教育課題である「不登校問題」です。未然防止やその解消に向けて、様々な取り組みを進めてきています。数的には若干の改善も見られますが、不登校や不登校傾向の子ども（新規・継続も含めて）、さらには毎月3日以上長欠児童生徒の実態には依然として厳しいものがあります。

令和7年度より市全体で「保幼小中連携モデル地域実践研究事業（3年間）」に取り組んできています。この中で作成された連携カリキュラムを基にした実践で育む5つの非認知能力を意識した指導、更には「生徒指導の4つの視点」や「特別支援教育の視点」で取り組むことにより、上記で述べてきた課題改善にも光が見えてくるのではないかと考えております。各学校におかれましては、今後とも地道で充実した取り組みの継続をお願いいたします。

結びに、本年度も1年間の歩みを振り返る「教育しまんと」が整いました。教育研究所並びに教育研究会の各種事業にご協力いただきましたことに心より感謝申し上げます。はじめの言葉といたします。

令和8年3月吉日

四万十市教育研究所
所 長 藤原 昭彦